



みずみどり

2026年4月1日 第173号

発行：いたばし水と緑の会

年会費 2,000 円 郵便振替 00170-8-352508 いたばし水と緑の会

<http://mizumidori2.eco.cocan.jp>E-mail : mizumidori@nifty.com

連絡先 坂本 郁子 板橋区中台3-27-E505 090-4618-1295

トンボ池にカエルが来た！ 産んだ卵塊は6個

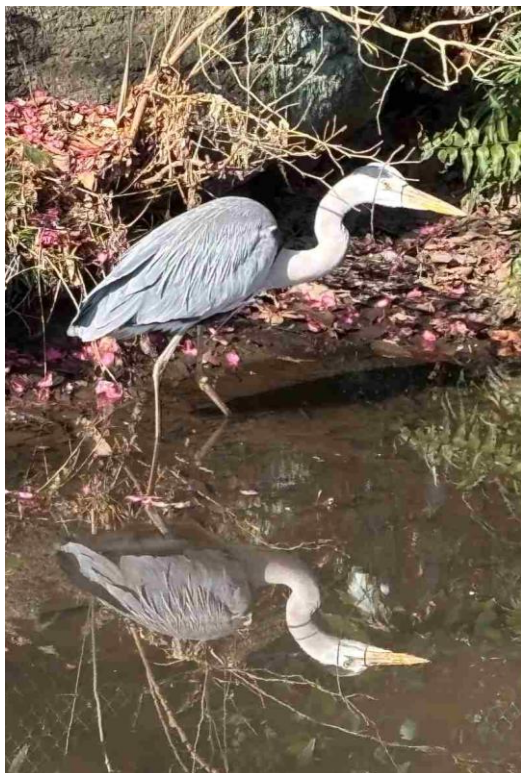


2月末、久しぶりの雨の後、カエルが産卵に集まりました。クックッと鳴く声、バシャバシャと水音を立てて、カエルがカエルに飛び乗ったりのカエル合戦のようすを布施さんが動画で撮影、グループラインで共有しました（便利なものですね。感動です）。3月1日、産み付けられた卵塊は6個ありました。



暦では今年3月5日が啓蟄（けいちつ）です。土の中で冬ごもりしていた虫たちが出てくる時期という意味です。以前は梅まつりの会場でカエルたちの婚活を見物したものでした。

2月、池底にたまったヘドロを除去するために、湧水の流入を止めました。浅くなった池にアオサギが来て（左下）、クチボソかザリガニを探していました。



干上がった池底にアオサギの足跡（右上）と別の動物の足跡（右下・ハクビシンかも）がありました。知らないところで、生

き物が来ているのですね。カエルの卵も食べるかもしれません。他の生き物??それは子供達です。昆虫網がほったらかしで、卵をあさった跡もありました。3月2日、池底のヘドロを除去する作業をしました。環境政策課の坂本さんと森さんにきていただき、底泥を掻き出し、運び出しました。泥は重くて重労働です。ありがとうございました。





棚田のような小さな池の底泥も掻き出して、土嚢で補強した畦にのせました。田んぼと同じです。田んぼでは、水漏れしないよう、田植えの前に畦を塗り固める作業をします。「畔直し」や「畦塗」は、田植えのようすを表現する春の季語です。



泥の掻き出し作業の前に、カエルの卵を採集してコンテナに入れました。作業終了後、コンテナにネットを被せて水際で保護します。もう一塊の卵は、もんどりカゴの中で保護。あとの卵は池の中でそのまま。生まれたオタマジャクシは自由行動です。

畔直しなどの俳句の季語、冬眠していた虫たちが出てくる「啓蟄」や、春の七草など、ありふれた自然が身近にあることがわかりますね。

ここは、季節や自然を感じとれる大切な活動場所です。(坂本 郁子)。

湧き水が減った！トンボ池の水位も低下

今年は非常に雨が少なかったと報じられています。これも異常気象なのでしょう。奥平さんによると、雨が降らないので、知り合いの農家では井戸水も枯れてしまうほどらしいです。トンボ池に流入する湧き水はわずか。湧き水は降った雨が地中に蓄えられた水です。湧き水の恩恵を忘れるなという自然の神さまのメッセージかもしれません。

冬のバッタ広場で



3月1日、木の葉が落ちて草がなくなったバッタ広場で、1年の振り返りをしました。

バッタ広場ができてから28年目になります。これまでの写真を見ると、バッタ広場も少しずつ変化しています。

コロナ以降、活動が滞り、バッタ広場はササが増えました。刈らずに放置したササや、途中で刈ったササが伸びて、固い茎となり、子供が踏んだり、転んだりすると危険な状態でした。

昨年は、木を切る作業もありましたが、初めから終わりま

で「ササを刈る」仕事でした。おかげさまで、伸びた固いササや、危険な切り口のササは、ほとんどなくなりました。でも安心は禁物、ササは成長が早く固い切り口のまま成長するので、見つけ次第切らなければなりません。

今年のテーマは「**雑草とクズに愛を**」です。

以前、南側（左側）は、雑草のイノコズチ、ヌスビトハギ、ヤブジラミなどのくっつき虫が繁茂していましたが、知らない間にほとんどなくなってしまいました。またクズも以前はいたところに繁茂していましたが、昨年は、「クズの保護区域」の藪以外は目立たなくなりました。なぜ雑草とクズが減ったのか。

ここでは野草と言わずに雑草と言いますね。野草はちょっと上等な植物で、雑草はいつでもよいただの草です。クズは嫌いな人が多い植物です。だから知らないうちに抜いてしまうことも…。でも雑草とクズは生き物たちのにぎわいに欠かせない大事な植物です。ヒメジョオンの花にはチョウだけでなく甲虫も来ます。また、虫たちはそれぞれ食べる植物がきまっています。食餌だけでなく、敵から身を隠す隠れ場所も必要です。バッタ広場は生き物たちの草原なので、人間の好みでなく、生き物の立場で植物を考えます。ササを食べる虫もいますが、ササは斜面林下にも生えているので、バッタ広場では、ササのない雑草とクズの草原を目指します。

ここで、清水長さんから、ササの刈り方の指導を受けました。カマは自分の方に向けないこと、ササの地際からさらに土に刃を入れて切ることによってササの成長を抑制するのだそうです。

さて、バッタ広場の外側に、チカラシバの群落があります。

以前、バッタ広場の外側は、赤塚公園サービスセンターが定期的に草刈りをしていましたが、2018年から、幅10mにわたって刈り残してもらいました。明るい草原を目指し、チカラシバの群落になりました。ササだけを除去しています。

環境なんでも見本市に出展しました テーマは「自然と共存するまちづくり」



2月7日、8日にエコポリスセンターで環境なんでも見本市が開催され、いたばし水と緑の会も出展しました。会のテーマは「自然と共存するまちづくり」で、通りがかった来場者にトンボ池とバッタ広場の活動を紹介して「自然が大事」だと思ってもらえるための展示です。話のとっかかりに、植物の種と虫の抜け殻や死骸を並べました。会員の感想いろいろ。

会の展示ブースに子供達が興奮して寄ってきたのはカブトムシや蝉などの死骸を乾燥させたものです。昆虫に自分の手で触れることができ興味津々の様子でした。

大人はトンボ池・バッタ広場の写真を見て興味を示していましたが、赤塚方面に行ったことがないという人が多く板橋区の広さを感じました。活動日の草刈りに参加したいと言った人がいましたが、来てくれると嬉しいですが、どうかな？ (小林悦子)

今回は会員になって初めての参加でした。

私達のブースはたくさん子どもたち、大人の方が来て下さり驚きました。展示物をじっくり見て触ってパネルをよく見ていただきました。バッタ広場、トンボ池がどこにあるか知らない方もいました。

まだ活動の主旨をうまく伝えられないもどかしさを感じながらも、トンボ池の散歩中に会報を手に取り「これを見て来た」とおっしゃってとても嬉しかったです。

草刈りしながら植物や生き物の観察をしたいと思います。

交代で他のブースを見ることもでき気づきもありとてもいい経験でした（佐藤克子）

子供達のためにならべて置いたセミを見て「セミがいなくなった」「セミの鳴き声を聞かなくなった」と言う人が5人ほどいました。「生き物がいなくなったらどうなるんだろう」と聞かれました。私も同じように思っていました（坂本郁子）。

ここ2、3年の酷暑でセミも蚊も真夏に居なくなりました。夏の終わり頃、蚊はいますが数は少ないと思います。セミも少ないので、蝉しぐれは貴重な感じがします。

成増は5丁目の公園あたりにセミは多いです。人間はクーラーを付けて凌げるけど、虫さん達は何か知恵があるのでしょうか？（奥平ゆかり）

クイズは来場者に話しかけるきっかけになります。会のクイズは、「カマキリの卵を見つけたらどうする？」でした。カマキリを見たことがある子供がほとんどで、ちょっと安心しました。

答えは3択です。

A 葉っぱや枝についているカマキリの卵をとって、かんさつする

B いじらないでカマキリの卵をみまもってあげる

C カマキリの卵をいえにもってかえる

元気良くカマキリを持ち帰る！と答えた子、観察するか見守るか悩んでいる子、お母さんが怒るから見守ると答えた子などいろいろな答えが聞けて面白かったです。総じて空気を読んでか見守るにした子が多かったです（鈴木より子）。

田んぼと生き物を考える環境講演会(江東区)に有志が参加

第1回 「草や虫も人間も、同じ生き物だと感じるのはなぜ？」（講師：宇根豊氏）（2月15日）

第2回 「アカトンボやドジョウの視点で考える水田農業」（神宮字寛氏）（2月21日）

以前、宇根さんがお書きになった「害虫・益虫・ただの虫」がずっと頭にしみ込んでいました。

トンボ池やバッタ広場は農地ではありませんが、どちらも「(半)自然」の場所で、虫たち（圧倒的に多いのがただの虫）がかかわりあって生きていける大切な場所です。なので、田んぼのお話に興味と共感を覚えました。農業—自然を守りつつ私たちの食を支えている—には日本もフランス（ヨーロッパ）のように自然保護の観点から補助金を出すべきだと思います。

さて赤塚は、都内でも田舎です。ありふれた自然が多いところですが、畑がなくなりどんだん家が建って、そのありふれた自然がなくなりそう。「公園にもっと自然を」と言いたいですね。

（坂本郁子）

活動・観察記録(2月～3月)



トンボ池

湧き水の流入をとめて、池底の泥を掻き出した。浅いところは土嚢と泥で畦の補強をした。5mmほどの稚ザリガニがいた。と言うことは池には稚ザリガニもいるし、稚ザリガニがくっついてお母さんザリガニも池にいる、ということ。まだまだいるようですね。1月25日トンボ池裏にセンリョウの真っ赤な実がありました。お正月飾りに使われ、鉢植えや庭に植えられる植物です。野鳥に運ばれてひとりでに生えてきたもので、気付いたのは今年初めて。2月15日には赤い実はすっかりなくなっていました。小林さんは、赤い実が落ちていか探していましたが、「やっぱり野鳥が食べて、糞と一緒にここに落とされたのかなあ」と納得。

トンボ池ではマンリョウが多いですが、実は枝につくので葉の陰に隠れてセンリョウのような派手さはありません。

トンボ池のそばに、やはりひとりでに生えてきたオモトがあります。センリョウやマンリョウと同じように鳥が食べて糞と一緒に落とされたのでしょね。

3月8日には、ヒメオドリコソウ(花)、フラサバソウ(花)、セリ、ムラサキケマン・ヤブジラミ、ヤブニンジン、ジロボウエンゴサク、ニワトコ(蕾)、畦にはツクシがあった。

カエル出現(7匹、後日1匹)、卵は6塊、アオサギ、ハクビシン?(足あと)、卵は一部を保護。

バッタ広場



3月1日、枯れ枝にミミズが引っかかっていた。

モズのはやにえではないか・・・とみんなで想像した。

モズの「はやにえ」とは

モズは木の枝に止まって虫や、カエルなどを見つけて舞い降り、嘴で捕まえ、木の小枝などにさして、一時保存する習性がある。

カマキリの卵

高い梢にある1個だけ。カマキリは小枝・ササやセイタカアワダチソウなどの茎などに、卵を産みつけるので、見つけた卵4個を藪の中に隠しておきましたが、子供が見つけて持ち去ったようです。カマキリも少なくなっており、この冬は今のところ卵は見つからない。子供の卵採集はやっぱり困る。カマキリ卵の保護にもご協力を。

活動のお知らせ

活動の問い合わせ等は 坂本まで 090-4618-1295

高齢社会での活動です。作業はほどほどに、お楽しみや探検を取り入れてやっていきます。会員の方も会員でない方も、無理をしないでご参加ください。カマなど道具は用意します。保険は個人で加入してください。

●赤塚ビオトープの手入れ

赤塚トンボ池 板橋美術館横の小さな池です。生き物たちのための土の池です。

バッタ広場 赤塚城址の郷土資料館の上あたり。生き物たちが暮らす草原ビオトープです。

活動日時（第2日曜日と第4土曜日）

4月12日（日）（総会のため赤塚での活動はなし）

4月25日（土）10時～11時半 ニリンソウの観察も

5月10日（日）10時～11時半

5月23日（土）10時～11時半

集合場所 赤塚トンボ池

持ってくるもの 汚れてもよい服装（長袖、長ズボン）と汚れてもよい靴、作業手袋、帽子、飲み物、

●日暮台公園と樹林地の観察 未定

● 総会と観察会を開きます

日時 4月12日（日）10時～11時半

場所 エコポリスセンター環境学習室（2階）

弁当またはどこかで昼食後 13時～ 観察会「崖地の樹林を見てみよう」

安全で自然豊かな板橋の森を子供たちの世代に残したいと考える観察会です。

日暮台公園→出井川支流の樹林地（中台南坂緑地→保存樹林→中台2丁目公園）

→元気な人はさらに歩く、行き先の詳細は未定

●ボランティアの参加を歓迎します。ご意見や自然情報もお寄せください。

ホームページ <http://mizumidori2.eco.coocan.jp>

いたばし水と緑の会は、自然と共存するまちづくりをテーマに、ビオトープ（赤塚トンボ池と赤塚公園バッタ広場）などの観察と手入れ作業、日暮台公園自然樹林地の定点調査などを行っています。観察と手入れを通して、季節の変化や新しい発見があります。不定期ですが区外の自然や保護活動の見学も実施しています。

●会員になってくださると板橋の自然情報を中心とした会報「みずみどり」（隔月発行）をお送りします（年会費2000円：振込先は表紙に記載）。